

翻刻『松ヶ丘山崎家略譜稿本』⑭

Ⅱ 雑載、諸物価、災害Ⅱ

〔※文中の■は読めなかった文字です。〕

（※中表紙）

松ヶ岡山崎家略譜稿本

附録雑載

袴田鷹邨未定稿

第七 雑載

当山崎家の現居住宅地は南西郷に在り。元来南西郷は昔日根下郷中西郷村の最南端にして、久保・太池・神代地等の小字の総称なりしか、明応文亀の頃朝比奈氏掛川城を築きし以来、往古横尾と称する地名を懸河と名つけて城下町を形成し、従て国道たる東海道も変遷を来して城下街を通過する事となり、為に西郷村は国道に中斷せられて南北に分たれたり。茲に於て寛永十四年国道以北を上下西郷并北西郷と称し、南を南西郷と呼ふことゝはなりぬ。而して其の當時今の西町十王町は西町と称する一ヶ町（延享二年の西町絵図には十王町を包括しあり）にして、即ち南西郷村と接続し、町並の人家にも地籍は南西郷に属するあり。復た国道以北にも鐘鋳場其の他の飛地を有したり。其の後人家の増加に伴ひ、新知川以西は十王町（十王堂のあるにより命名）と改称し、西町は新知川以東のみに縮小せられしも、南西郷は依然として旧の如く錯綜す（爾来四年を経て寛延二年調の南西郷図には十王町往来とあり）。

当山崎家は初め東山口より来て西町に居を定め（六代万右衛門嘉永四年）更に十王北裏の南西郷村廿六の坪に転居し今日に及へり。移転後と雖も世人呼ひ馴れし西万を以て略称したりしが、何時の頃より歟松ヶ岡の名称を附せられ、爾来世人両ながら併称す（当家西町在住中に於ける最古の日記に松ヶ岡とあり 可考）。

当山崎家は二三代の頃より掛川藩主太田侯を始め諸藩の用達を命せられ、逐次各藩士の出入頻繁を極めたり。是よりして地方名

族の称弥々高く、明治十一年畏くも 明治天皇北陸御巡幸の御途次、当家を行在所に御指定あらせらるゝに際し、西町十王町の境なる新知川に架せる橋梁を改称し、之か費用を出金して（七代隠居）徳次郎君の意見を以て西王橋と命名したり。此の時西王橋の西端川添に私費を以て石垣を築きたり。

明治二十二年四月一日町村制を施行せられし際、南西郷村は南郷村に属して旧村名は大字となり、当家は南郷村民となる。

明治二十六年十二月南郷村中下俣・南西郷・結縁寺の地籍を掛川町に編入せられ、当家は掛川町民となる。

明治二十八年八月廿日静岡県告示第四十一号を以て西南郷村を設置せられし際、元と南西郷中一ノ坪・十王南北裏・鐘鑄場・中西其の他一部の地籍を除きて新村分立せられたるも、当家は依然掛川町南西郷住民として従来の通り掛川町籍に止まるに至れり。

当山崎家の出入りせし諸侯は掛川藩を始めとし、横須賀藩・浜松藩・田中藩・中泉代官所・内藤備後守・青山下野守等なり。就中内藤侯は大成武鑑に拠れば、九州延岡の城主にして、同侯は延享四年同地七万石を賜はり、爾来明治維新に至る迄累代所領す。当家第四世万右衛門君が文政年間出府の砌、江戸屋敷に伺候せる而已ならず、同五年より出入扶持拾人口を拝領し、或は大著資治通鑑を下賜せられたるか如き特殊の恩遇を蒙りたるを思へは、格別濃厚の御関係ありしことを証するに足る。加之青山下野守は武鑑に依れば丹波笹山の城主なるも、是亦関係不明なり。越州侯の如きは何人なる歟不明にして、事蹟詳かならされは詳細之を記述するを得ざるを遺憾とす。他の諸侯に就而は以下其の交迭を記述して後考に資す。

（※歴代の掛川城主・横須賀城主・浜松城主・田中城主・中泉代官川省略）

第八 諸物価

山崎家の金銭出入帳は相当古き年代より保存せられ、用留の如きも亦重要な出来事は洩れなく記録せらる。而して出納帳は中津を以て横長に仕立其の記載の順序は(1)青物口(2)味噌、酒、酢、醬油、塩、糒、茶の口(3)魚類口(4)菓子并なりくだ物口(5)炭薪口(6)筆墨紙口(7)油蠟燭口(8)煙草、薬口(9)反物、呉服、并足袋、股引其外糸取賃、仕立賃、手拭色々染物賃口(10)諸道具并永相用候品色々口(11)日用諸色并荒物、小間物口(12)諸色 寺社方定式年忌、仏事、年玉、年末外色々口(13)諸家様方御座敷進物并商用諸色小遣ひ口(14)物参り他所行小遣ひ口(15)諸普請口(16)西町十王掛り物口(17)飯米并男女給金の口等に小口分類の口座を設けて記録整理しありて、各々其の時代の物価変遷、経済の消長をしるへき唯一の宝典たり。今慶応以降の簿冊中主なる事項を抜萃して後考に資せん。

慶応元年

米六俵六斗替 糯米六俵六斗替

五月晦日 金壹両 松平周防守様御役人中様御上様御泊リ之節御茶代

として被下置

金三両百五十八文 御同人

右同断之節六十四人分旅籠代損料代共請取

金壹朱百文 御同人御馬式疋旅籠賃豆壹升代受取

慶応二年

米三俵四斗替 糯米三俵四斗替

金拾四両 松平嘉左衛門様亜国中折小銃壹丁之代

金七両弍分 舶来両眼遠目かね壹ッ代

九月十六日 金三分 江戸御侍医成田宗伯様陸地御供御下リ之節診察相

頼候ニ付礼差上

慶応三年

米両二四俵替 糯米両二三俵四斗替

五月廿五日 金壹分 川井村一木喜三司様豆州湯治ニ参リ候餞別失念ニ付此度帰り候節遣し

八月廿八日 一、四拾貫文 西町十王惣代中町内之申請所へ御札降り候ニ付まき錢遣し此わけ式拾貫西町式拾貫十王

九月四日 金九兩貳分百廿四文 西町役人中

右同断おかげニ而所々降り候処三家の表へ飾り物丁内之者祭札の様さわけ候糯米三俵惣体之中へ遣ス役人中迄遣し取計頼候右糯米十王町為吉殿より買入候代金同人へ相渡ス丁内へ遣ハし候ハ八月廿二日也

九月九日 金拾兩 西町役人中

右同断おかげ入用相渡ス 凡祭礼入用割合のよし

九月九日 金拾兩 十王町為吉殿円八殿いせ殿伝八殿代三郎殿

門前ニ御札有之旨乞食申来リ候間店之者参見候処成田山御札有之右不浄之者申来且門前之事ニ付如何致候哉真偽甚如何ニ付宅ニテ祭モ難相成候併御札ハ相違無之由右十王の中四五人へ右之状相晰し宜取計呉候様頼候処右之者取計ニ而菩薩院の前へ御棚鍔りして餅をまき日待等致度申候別ニ酒五升日待之時不足ニ付頼ミ有候間別ニ遣し候

十月二日 金貳兩壹分 問屋衆

参リ候節がい者花代遣し本問屋場江御札降り候ニ付右之者連参リ

十月十五日 一、五百五拾文 西町幸吉 小豆壹斗

慶応四年

四月俵米 壹兩二分二匁三分壹厘

五月〃 壹兩二分三朱

六月〃 貳兩貳分貳朱

四月五日 壹貫四十七文 おこう様 供おふみ 弁蔵 巳吉

嘉平

中泉行小遣 此わけ 六百七十六文昼支度四人分

三百七十一文 茶代 わらじ

四月十二日 八百文 おこう様御帰リニ付籠人足供人四人へ遣わし

四月十六日 金壹分三朱三百七十七文 おこう様中泉行色々小遣

此わけ壹貫五百文まん中五袋 三百文ふきおしろい代 三
匁五分じゅばんゑり壹筋 三百文曲ケ物油三ツ代 三匁
壹分根掛壹ッ代 四拾八文きり干し代 金壹朱四百文
色々小遣

四月十七日 金貳分 永富頭右衛門様 同雄吉様 江戸より御引越ニ

付酒肴料差上

四月廿三日 貳貫文 島田方大井川越男

供川越也口明二百九十六分の時主従二人両掛一荷

五月十六日 金三分三朱 西町役所源吉弥助善藏外ニ拾貳人四月廿八

日方大井川支に付遣し

七月廿五日 金七兩三分六貫七百六十六文 田中様御所替ニ付参上

七月廿六日 金貳分貳朱六百文 おせい様宗高へ御出之節金谷宿より

宗高まで人足駄賃杯

金貳分六百 大井川越ちん

八月 百貳拾四文 下男衆助覚次郎様乳母尋ニ行小遣

明治元年（九月八日改元）

九月廿三日 金壹兩壹分 青山左京太夫様内黒沢：様御姫様御若様御下

リ御泊リニ付献上物いたし候ニ付御目録被下置候

金壹兩貳朱貳百五十

右青山様御泊リ之節御旅籠御二方様分

御宿料共三兩 御昼支度御二方様貳兩 金五兩御本陣へ御

下ケニ相成候処御本陣ニ而者御行幸普請中ニ付手代壹人
参リ居候仕出し安五郎諸道具夜具給仕等皆手前ニ而致候
ニ付手前右五兩請取呉候様本陣方申呉候得共手前之儀も

御上様より御頼みも有之且諦倫院様御入も相成候儀ニ付
右様の心配にも不及と相咄し候得共是非なく受候 本陣
安五郎手前三ツ割ニ配候

十月廿一日

金貳両貳朱三十七分九百十六文 西町役人中
此分四両壹分貳朱分 円札壹両ニ付◎八六六四―

相場但当百

当月三日御泊輦之節広幡内大臣様御泊り上下廿四人馬壹疋
之御旅籠代受取

十月廿五日

金三分 横須賀様

当月三日御泊輦之時借家忠藏の処へ殿様御休ニ相成手前
茶草等差上候為御■被下忠藏へも貳分被下候よし

十一月十二日

三百五十六文 丈助 月岡様御陣屋江本わるあんと恐悦ニ
参り候小遣

十一月

金壹分壹朱壹貫貳百 御賄方様

殿様当月貳拾四日京都方御着城恐悦鯉鯛料壹両 松市伊達
方手前三人ニ而割合

十二月

拾貳両貳分 才助 畢山婦人掛物一幅代

十二月三日

金壹分壹朱 御家中西川清左衛門様東京御出ニ付錢別差
上 伊達方喜平、松市、手前四人割

十二月廿八日

金五両二朱 横須賀様御歳末差上

此わけ金貳分御年寄青山源右衛門様外廿四人

金貳分貳朱 西町馬持駒吉峯藏外二十八人 先日未た二度
目の大井川支商買六ヶ敷ニ付願ニより候金壹朱ツゝ拾人
へ遣ス

拾分 三度目大水ニ付渡世六ヶ敷願ニ付惣代中へ遣ス

鏡一丁研賃四百五十文 火打石二ツ百六十八文 ほくちの
木二十四文

糸百目取賃八百文 縞壹反織賃壹分 苘切賃一分八百 御
家中木野曾右衛門 寒羽織一枚壹分三朱 白布一反壹分
三朱三百 柿壹ツ三十文

明治二年

四月俵米 三両壹分 春麦三両壹朱

五月〃 三両壹分貳朱

七月〃 三両貳分三朱 十二月春麦三両貳分

覚次郎様乳母給金六両

四月十八日御賄方御役所 十三日殿様京都方帰城之節為御肴料金五両

送ル

献上？鳥井、松本、鈴木、手前四人ニ而割合

七月十二日金壹分 川井一木喜兵衛殿、御仲間東京方掛川迄掛物駄賃と

して酒代遣し

九月十九日紙幣三両壹分 川井一木喜三司殿 此わけ貳両三分鼈甲等

貳分蒔絵木櫛壹

按摩二百文―四百文 相良舟大工日傭（内飯）五百文

大工二十一人分日雇参両貳分 女日雇（先飯）二百十二文―

五百文

女日雇（内飯）百三十二文 下男給金七両弥平 八両壹分太

十 五両伊十 下女給金三両たけ

明治三年

入三百十八俵 壹両ニ米壹斗壹升六合替

三月俵米 四両貳朱 三月春麦壹両ニ壹斗四合

四月〃 四両壹朱

六月〃 四両壹分二匁壹分四厘

九月〃 四両 十二月 春麦三両壹朱 覚次郎様乳母給金六両

下男給金太七七両 廿六才者八両 下女給金卅才者四両 一

人三両貳分

三月六日 金壹分 覚次郎様初節句ノ節鍾馗画■ニ付礼遣し

四月 貳百文 豊橋迄書状壹通駄賃

六百文 東京木材屋伊助方同

七月廿九日金百四兩皇清經解壹分代
八月 拾六文 状持込 壹分式朱 雪駄式足代

上々白紬壹反百五拾文

金八兩 川井一木喜三司ピストル小筒一丁皮袋付代払

明治四年

入米六百廿八俵 米兩ニ式斗壹升

五月俵米 貳兩貳分式朱（兩ニ壹斗六升替）

八月〃 壹兩三分式朱

十二月 壹兩壹分式朱 覺次郎様乳母給金六兩

四月 金拾兩 探幽金屏風一双

五月十日 百文 陸運所曾我政次郎様岡崎行書狀一通賃払

五月十七日玉子拾ヶ六百六拾文

五月廿三日金三分式朱 新丁勘治外二人

曾我準平先生宅方牧ノ原迄御駕籠ニテ御送り候賃払

五月廿五日金參兩壹分 市場様 市之進殿 竹松殿

当月十二日方廿四日迄十四日間劍術稽古料遣し

此わけ金貳兩貳分市之進 金三分武松

十二月八日百文 御伝馬所 吉田方状壹通賃払

百文 同 浜松方

参百文 同 東京方書狀壹通賃払

参百文 陸運会社 同断

下男給金春平（廿六才）八兩貳分 下男佐助（廿三）八兩二

分 下女四兩

左官一人拾匁―拾貳匁 表具屋一人（内飯）貳分百

木挽一人（先飯）拾貳匁 大工一人（先飯）拾貳匁

九六鋤一人梅若（内飯）二百五十―三百 日限女雇人百三十

―百五十 田草（先飯）五百

酒一升二分 敷島酒壹樽五兩 豆腐八十文―百文 炭四俵貳

分式朱 薩テ緋壹反三兩 サツマ木綿緋一反百八十九文

明治五年

入米六百三十四俵 兩ニ三斗壹升替
五月俵米五拾俵 六拾七兩三朱三匁二分八厘
九月〃 壹俵壹兩三朱
十一月〃 壹兩壹分壹朱壹匁二分五厘

覺次郎様乳母給金五兩

下男給金一人八兩二分 一人八兩壹分 一人九兩貳分

下女給金四兩二人 四兩貳分一人

大工一人拾七錢五厘十二匁 人夫一人(先飯)二朱 同(内飯)

六百 女日雇(田畑仕事)三百文

おみつ様看病宇川村行凡八十人二百十二文ツゝ

豆腐一丁八十文―百文 玉子十ヶ八百

八月 豆腐一丁八厘

九月 金壹円五十二錢壹厘 ランプ代

十一月十二日金五錢八厘三毛 角ヨウシ一本

十二月 金四錢 糰壹升 金拾貳錢 上酒壹升

明治六年

入米六百三拾七俵 兩ニ三斗五升七合

二月俵米五俵六兩壹分二朱二十匁八分二厘

六月〃 一俵壹兩貳分二朱三匁三分

八月〃 壹円九拾五錢三厘五毛

十月〃 壹円七拾壹錢四厘五毛

同月春麦〃 壹円四十錢

下男給金拾六円壹人 拾五円壹人

下女給金七円 壹人 六円 貳人

九六鋤壹人増藏拾八錢三厘三毛

疊屋拾貳錢五厘 木挽屋七錢五厘

左官拾六匁 桶屋拾五錢

人夫壹人九錢

人夫壹人（内飯）六錢貳厘五毛

同女壹人（内飯）貳錢―三錢五厘

女日傭三人壹朱四百廿五文 壹人三百五十文

〃 六人三朱貳百廿五文 壹人三百五十文

一月一日百拾文 旦那様 覺次郎様 供綱吉

天王様御参詣ノ節御小遣ヒ

一月 貳百文 紺屋町郵便所

貳百文 同 中泉行書状

二月十七日拾三錢五厘 浜松県岡田良一郎 丈助参上ノ節金米糖代

六月十日壹分五百文 研屋町郵便所静岡中ノ店魚屋峯吉宅ヘ状壹通賃払

（月方拾三匁五分）

七月九日壹分拾文 浜松県税務係判取帳五千円証印税上納 但包分共

十月六日拾九錢 四九五郎様 おいそ様 覺次郎様 供利助銀藏おふさ

足ゲイ見物御出之節木戸錢小遣

明治七年

二月俵米壹俵貳円参拾壹錢八厘六毛

五月〃 貳円五拾錢

十月〃 参円五拾錢 同月春麦壹俵貳円参拾参錢参厘

四月十二日金貳錢 郵便所 東京行書状賃

十二月二日金貳拾五錢 掛川小学校 覺次郎様入門ニ付束脩差上

同 日金貳拾五錢 神代地学校 同人読書入門ニ付右同断差上

明治八年

入米千百貳拾四俵

五月俵米廿五俵七拾六円八錢七厘

八月〃 壹俵参円拾壹錢壹厘

十一月〃〃 貳円五拾錢 二月春麦壹俵貳円七拾錢

下男給料拾七円 拾五円 拾三円 各一人

下女給金九円二人 拾円壹人

木挽（先飯）參拾錢 疊屋壹人貳拾錢拾六匁
九六鋤壹人 桶屋（内飯）拾三錢三分三毛

同 拾五文

仕立屋壹人貞次郎（内飯）貳拾五錢

表具屋貳拾錢 男人夫（先飯）拾貳錢五厘（内飯）八錢

女人夫參錢五厘―五錢

二月十四日金貳円 下平川川田榛栄 榛屋十二人分態々一度招待致候ニ
付礼遣ス宅ノ小兒外友吉弁藏久作ノ小兒共一同兼遣
ス依テ右三人ハ河田一円ノ旨申遣候ニ付別段挨拶ニ
不及候

明治九年

入米千八拾壹俵

二月俵米壹俵二円 五月俵米壹俵二円

八月 〃 一円七十八錢 十一月 〃 一円五拾六錢

下男拾五円 下女九円五拾錢

木挽（先飯）貳拾五錢 大工貳拾五錢

茶師參拾七錢五厘 表具屋貳拾錢

男人夫（内飯）拾貳錢五厘

女人夫（内飯）四錢五厘（先飯）八錢五厘

明治十年

入米千三百八拾四俵

二月俵米壹俵貳円 二月春麦壹円廿六錢

五月 〃 壹円貳拾七錢

九月 〃 貳円貳拾五錢 十二月俵米壹俵壹円七拾貳錢

下男拾五円 下女九円五拾円

大工貳拾五錢―拾五錢 左官貳拾五錢

疊屋貳拾五錢 桶屋（内飯）拾壹錢 瓦屋貳拾五錢

茶師三拾七錢五厘 塗師屋（内飯）拾八錢三厘

九六鋤（内飯）拾貳錢五厘
男人夫（先飯）拾貳錢五厘―貳拾錢（内飯）九錢以上
女人夫（先飯）八錢（内飯）三錢五厘―四錢貳厘
行幸男雇人（先飯）廿壹錢六厘 稻扱女（先飯）十錢

明治十一年

入米千貳百八拾三俵

二月俵米壹俵壹円八拾七錢 六月俵米壹俵貳円五拾錢三厘

九月〃 〃 貳円四拾五錢

下男給金拾五円壹人 拾四円壹人

下女 九円五拾錢壹人 拾円壹人

大工貳拾九錢 左官貳拾五錢―參拾錢

桶屋（内飯）貳拾錢 石垣積（先飯）貳拾六錢

茶師三拾七錢五厘 九六鋤（内飯）拾貳錢五厘

男人夫（先飯）拾貳錢五厘―拾五錢 女（内飯）五錢

明治十二年

二月俵米壹俵貳円八拾五錢 五月俵米壹俵參円

十月〃 〃 參円貳拾五錢

明治十三年

二月俵米壹俵參円貳拾五錢 五月俵米壹俵四円拾參錢

七月〃 〃 四円參拾五錢 十月〃 〃 四円貳拾錢

下男給金貳拾六円 下女拾三円壹人 拾五円壹人

男人夫（先飯）三十二錢（内飯）拾六錢

明治十四年

二月俵米壹俵四円八拾錢 六月俵米壹俵四円四拾四錢

九月〃 〃 參円八拾四錢 十月〃 〃 四円拾錢

下男給金參拾五円

男人夫参拾五銭 女人夫拾銭―貳拾銭

明治十五年

五月俵米壹俵参円五拾銭 六月俵米壹俵参円六拾銭
八月〃 参円八拾銭

下男給金参拾五円 下女給金拾九円壹人 貳拾円壹人
茶師五拾銭 表具屋五拾銭 植木師五拾銭
指物指民（先飯）四拾貳銭五厘
男人夫（先飯）三拾五銭（内飯）貳拾銭 女人夫貳拾銭

明治十六年

二月俵米壹俵貳円七拾五銭 五月俵米壹俵貳円八拾五銭
七月〃 参円拾銭

下男給金参拾円壹人（音吉） 参拾五円貳人（久蔵、金作）
貳拾七円（嘉平）

下女給金拾九円壹人 貳拾円壹人
男人夫拾八銭 女人夫拾貳銭

畳屋三十銭―三拾五銭 大工四十銭―四十五銭
左官三十五銭―四拾貳銭 石工三十七銭―四拾貳銭
炭団貳拾貳貫五百替 焼芋壹升貳朱八厘
味噌壹升三拾壹銭 白糍壹升四斗五厘
米搗賃壹俵拾三銭七厘 大豆四斗五升壹俵貳円三拾六銭八厘
中酒壹升拾五銭貳厘五毛―拾三銭

（※省略Ⅱ明治十七、昭和十一年について、俵米価格、下男下女の給金、職人日当、物価の各項目の表）

第九 災害

当山崎家々祖才兵衛か居を掛川に占めし以来、当地に於ける風水

火災の惨害は枚挙に遑あらず。累代の当主常に意を救貧済民に用ひ其の都度恤救金品を醸出したること挙げて数ふへからず。然れとも一々之を叙するは頗る冗長に亘るを以て、于茲災害の大概を録し、美拳は被害の甚大なるもの而已を録して後考に資す。

災異調

初代才兵衛君時代

元文二年二月一日

夜五つ半刻、新町五郎左衛門方出火、東番所外人

足役所四十一軒類焼。

〃 三年十月十九日

夜七つ半刻、瓦町傳右衛門出火、家数百三十軒、寺六ヶ寺焼失。東木戸ニテ消留。瓦町廿七軒、仁藤六十九軒、木町廿七軒、塩町七軒類焼。

延享二年三月十一日

昼七つ刻、下俣町権六方出火、幸ヒ大事ニ至ラズ。

同日

昼八つ刻、研屋町桶職市三郎方ヨリ出火、是亦大事ナシ。

寛延元年十一月廿五日夜四ツ半刻、連尺町深見屋与右衛門方ヨリ出火、

木町・塩町・仁藤町類焼ス。竈数二百十軒、東木戸ニテ消留メ西ハ連尺・中町堺ニテ消止ム。

同三年十一月四日

朝二藤町源六方出火、娘かめノ過失、一軒焼失。

二代万右衛門君時代

宝暦七年十月七日

明ヶ七つ半刻、連尺町富士右衛門方雪隠ヨリ出火、奉行松浦忠兵衛ノ取調ヲ受ク。

同年十二月廿四日

明ヶ七つ刻、十九首町吉左衛門方出火、西部ニテ南側四軒・北側五軒残ルノミ。火元ハ東光寺ノ西五軒目辺。

宝暦九年四月廿五日

五ツ半刻、瓦町八三郎方出火。

明和二年

掛川仁藤天然寺全焼ス。(後■問題ニ付放火ト伝フ)

三代萬右衛門君時代

明和九年正月三日 瓦町法華宗宝林寺、紺屋町了源寺焼失。
安永二年 仁藤町真如寺類焼。
天明七年 大飢饉。

四代万右衛門君時代

文政九年六月二日 昼八つ刻、紺屋町喜左衛門借家久太郎方出火、紺屋町廿二軒類焼。中町へ延焼シ丸ノ内及龍華院御靈屋焼失。御屋敷八十軒町方百三十軒焼失。
同 九年 木町けん齊ノ火事。

六代万右衛門君時代

天保四年 飢饉アリ。
同 七年八月十五日 塩風被害アリ。
同 年 大飢饉アリ。
同十三年 木町ニ火事アリ。度々ノ火災ニ付領主へ願上、弘化元年以後喜町ニ改ム。
嘉永以前 越前屋火事アリ。
安政元年十一月四日 大地震火事。
安政五年六月十二日 午年ノ大洪水。

七世万右衛門（徳次郎）君時代

不明 西町五郎江茂火事。
明治元年 大洪水。
同 元・二年頃 仁藤町天然寺門前紋屋火事。

八世千三郎君時代

明治五年十二月廿八日連尺町竹屋ヨリ出火、百五十軒焼失。
同 九年六月十六日 連尺町伊勢糸ヨリ出火、百三十軒類焼。
同十七・八年 下俣町塩屋ヨリ出火。
同十八年五月 下俣町按摩屋白仲江茂方ヨリ出火、五・六軒焼失。
同十九年十二月 十九首町笹屋三輪喜三郎方ヨリ出火、十五戸焼失。

同廿一年二月十六日 緑町集楽館ヨリ出火、十五戸延焼。
 同廿四年十月廿八日 大地震アリ。(濃美)
 同廿六年六月 大千魃。
 同廿七年三月三十日 横町橘屋田島忠吉方ヨリ出火、横町十二・三軒、喜町四十七・八軒類焼ス。
 同 年十二月四日 西町戸塚屋ヨリ出火、二十三軒焼失。
 同廿九年三月二日 午後四時半、大西斎藤平十方ヨリ出火。
 同 年七月 紺屋町佐益商会ヨリ出火。

九世淳一郎君時代

明治三十年九月八日 暴風被害アリ。
 同三十二年八月 旱魃アリ。
 同 年九月六日 暴風被害アリ。
 同三十二年一月廿八日 掛川駅通米作同業組合事務所出火、小使・栄蔵焼死。
 同 年 城西本間忠弥方出火。
 同三十二年十月七日 洪水アリ。
 同三十三年一月四日 西町海望亭ヨリ出火、全焼百八十八戸・半焼六戸ヲ出ス。
 同 年七月八日 洪水アリ。
 同 年九月廿八日 暴風雨被害アリ。
 同三十五年二月五日 蓮福寺門前出火。
 同 年六月廿五日 洪水。
 同三十五・六年 城西小笠再製出火。
 同三十六年七月一日 洪水。
 同三十七年二月十二日 正願寺前岡野政■方出火。
 同 年八月十二日 城西梅村たき方出火。
 同三十九年一月十七日 中町鈴木楼扣屋ヨリ出火、類焼十三戸。
 同三十九年一月廿五日 肴町蓮福寺裏出火、三戸焼失。
 同 年十二月四日 松原長谷平太郎裏納屋出火。

同四十年十二月廿七日下午俣町錢湯久保屋ヨリ出火。
 同四十一年九月三・四日両日暴風雨。
 同四十二年三月廿七日下午俣町足立藤太郎方出火。
 同年十二月二日 紺屋町山本善作裏二階ヨリ出火。
 同四十三年八月九日 洪水。
 大正二年三月十日 篠場官林大火災アリ。
 同年三月十二日 午后九時半西町元紋屋（明屋）ヨリ出火、大事ニ
 至ラズ消止ム。

十世 当代

大正三年八月廿九日 暴風雨。
 同 五年七月十三日 森町堀再製方出火。
 同 年八月十二日 六軒町飯田茂作方焼失。
 同 九年九月十三日 新町堀再製出火。
 同 七年七・八月 米価暴騰騒擾事件各地ニ起ル。
 同十一年九月三日 新町堀再製三回目火事。
 同十二年九月一日 関東大震災。
 同十三年四月十三日 十九首豆千代土蔵出火。

（続）